第６回神戸市市民福祉調査委員会計画策定・検証会議ワーキンググループ　議事要旨

１．日　時　令和２年９月 29 日（火）午前 10 時 00 分～午前 12 時 00 分
２．場　所　神戸市役所１号館 24 階 1241 会議室
３．議　題（１）社会福祉協議会の取組について
　　（２）次期“こうべ”の市民福祉総合計画の策定について

議　題（１）社会福祉協議会の取組について

（事務局より資料１について説明）

（委員）
セミクローズな居場所とのことだが、利用者はどのようにしてそこにつながってきたのか知りたい。
昨年度の市民福祉に関する行動・意識調査で「気軽に相談できる場所がない・相手がいない」という相関がみられたので、予防的な視点の取り組みが必要かと考えており、そういった繋がり方をしているのかが参考になる。

（事務局）
本人が社会的なつながりを求めて地域福祉ネットワーカーを訪ねてきたパターンもあるが、あとは色々な関係機関から、就労継続支援 B 型も利用が困難だが、なにかしらの役割があればいいようなケースの居場所ないかと相談が入る場合も多い。また、ボランティアセンターに登録されているボランティアからの紹介もある。
ただ、こういった居場所にも繋がらない人もいる。そこを今掘り出そうと考えているところ。セミオーダーの居場所をつくりたいと考えている。
それと、居場所というのは当然一人ひとり異なる。例えば、こどもがいる人の場合は児童館へつなげたようなケースもある。

（委員）
課題が複合化したような、いわゆる処遇困難ケースは、地域の人に連れられてネットワーカーのところにくる場合もあるのか。

（事務局）
おっしゃるように地域住民に連れられてくることもあるが、そういった場合は「どうにかしてほしい」といった排除からのスタートが多い。この場合、地域住民と本人の関係はマイナスからのスタートになる。そういう場合、ネットワーカーが地域との調整をする。

（委員）
地域の居場所を支えている住民はどんな人が多いか。例えば民生委員や自治会長などが多い、高齢者が多い等の傾向はあるか。

（事務局）
中央区社協は、様々なボランティアが多い。ボランティアを含め「居場所をつくっている」という達成感が得られるような居場所にしたいと考えている。
テーマ型のボランティアと地縁のボランティアがいるが、先ほど申しあげたように、処遇困難なケースはいきなり地縁型のボランティアが入ることは難しい。
東灘区のえんがわプロジェクトは、借りられた空き家を地域共生の居場所として使うことを前提に、地域と事前会議を行った。
ひきこもり等の当事者も、コーヒーを淹れるとか、他の手伝いをしてもらう等の役割を担ってもらうかたちで活動していただいている。

（委員）
福祉サービスの事業所を展開していても、そこにつながらないという課題は当然ある。実際、自分が当事者側だったら、いきなり福祉サービス事業所に行こうとは思わない。そこで最近、古民家を借りてカフェを開始した。カフェをツールにして福祉に寄ってもらえないかということで試している。
ペンキ塗りも未完成で、畑もあるが手付かずの状態のままスタートし、例えば地域の高齢者で技術をもっているけれども現在は活動していない人と、学校等と連携して地域の子どもたちとペンキ塗りをしてもらう。そうすると法人側も経費節約になり WIN－WIN となる。コロナの影響もありあまり大々的に募集できず実際にはひきこもりの中学生と、残りはスタッフとスタッフの子どもたちでスタートした。その中学生がスタッフの子どもの世話をすることでお互い楽しそうに過ごし、スタッフは事務仕事に専念できた。
そういう巻き込み型の活動が今後さらに必要で、先ほど説明にあったとおり、役割づくりが要になるだろうなと思う。役割があるので参加してほしいという声かけでないとなかなか参加しづらい。事業者側は人の役割をつくることが役割であると思う。
あとはテクノロジーでできることは活用するべき。登録ボランティアの経歴などを登録できて、例えば元教員と経済的理由で塾に行けない子どもがいる世帯のマッチングなどは、テクノロジーを活用できればスムーズになる。また、SDGｓの活用も重要。

（事務局）
おっしゃるように、社協でも居場所づくりの際に事務局だけで物品を揃えるのではなく、わざと欠けた状態の場所を用意し、地域の方に机や布団を持参してもらい、地域住民が自分たちで場所をつくっていくようにしている。

（委員）
あえて欠けた状態＝隙をつくって巻き込んでいくやり方が大事。

（委員）
参加している住民の疲労感みたいな声はないか。

（事務局）
コロナの影響もあり、講座もなかなか行きづらい状況だと思われるが、講座の案内をすると多くの申し込みが集まる。みなさん何かやりたいという気持ちが強いようである。ただ一方、いくらボランティアを養成しても、その後の活動につながっていないのが課題となっている。ボランティア講座に参加する半数の参加理由が自己啓発の為であることが要因かと思われ、参加者や市民の意識改革が必要であると感じている。

（委員）
福祉というとどうしてもハードルが上がる。みんなが「我が事」として意識すれば変わっていくだろう。「人を助けること」「自分が困ること」がより身近に感じ取れるような意識改革という長期の視点が重要。発信する人がいれば変わっていくが具体的にどうするかとうのは検討が必要である。

議　題（２）次期“こうべ”の市民福祉総合計画について

（事務局より資料２について説明）

（委員）
３本柱（人づくり、仕組みづくり、環境づくり）について確認したい。①だったら具体的にこれとこれとこれと記載する。個人的には①は人・地域づくり　②は明確に公的サービスで総合支援づくり③環境づくりであれば、より大きな（ほっとかへんネット等）ネットワークについて。また、福祉教育についても入れたほうが良い。

（委員）
認知度の上昇とあるが、ワードの定義が必要かと思う。

（委員）
評価とセットで考えることが必要。社協の話を聞いて「ソーシャルインクルージョン」の理念に対して、市民が何をできるのかを考える必要。役割が違うと思うので、そこを伝えたほうがいい。福祉にいろんな人が関わっていくストーリーが大事である。

（委員）
次の計画につながっていくためにどうしたいのかの検討が必要。福祉教育（意識づくり）が大切かと思う。

（委員）
市民福祉に関する行動・意識調査結果の相関を見ても、大きな特徴はない。

（委員）
ネットアンケートは可能なのか。

（事務局）
可能ではあるが、市民全員が対象ではなく、神戸市に登録しているネットモニターのみに限定されてしまう。

（委員）
KPI を設定し、後追いしていってみてみるのは重要。何が効果的なのかがわかる。計画を見た人口が増えるほど、理想の数に近づくことが必要。

（委員）
市民に役立つものとして、圏域設定を障がい・高齢・社協それぞれを並列するのはどうか。

（事務局）
方向性はどうか

（委員）
コラムにどういったことが記載されるかで、具体的なところが見えてくる。現案から大きく変える必要はないと思う。
地域福祉計画も兼ねているので、コラムで具体的なところが見えればいいと思う。

（委員）
当事者活動についても記載したほうが良い。
また、３つの方向性が連動することがいいことであるという総事例があればいい。

（事務局）
再度検討する。